

「ESD の 10 年・世界の祭典」推進フォーラム 第 3 回事業化ワークショップ議事録

2011 年 3 月 9 日於立教大学
14 時～17 時

■「はじめに」：阿部治代表

ESD の 10 年を総括するための会議を 2014 年に日本に招致することになった。2014 年に国連や政府が国際会議をして終わりにするというのではなく、ここから ESD をスタートさせるということが必要だ。現段階ではまだまだ ESD は浸透していない。ESD を世界で推進するためにまず日本からオールジャパン体制で、あらゆる局面で ESD を推進することが必要だ。



そのための中心となるエンジンとなる母体をつくるための活動がこの「ESD の 10 年・世界の祭典」事業化ワークショップだ。

事業化ワークショップの初年度は「2014 年の“世界の祭典”のイメージ」を作り、それをパンフレットとした。

そして今年度は、まず地域特に RCE やユネスコスクールがどう参画していくか、ついで企業の方たちに理解を深めていただくということで、CSR と ESD との連携の在り方を探ってきた。

今日はそれらの議論の総括を行うことを目的に開催している。ここでの総括は、昨年度に作成したパンフレットの改訂に反映させていきたい。

■「ESD の 10 年・世界の祭典」推進フォーラムの活動経緯と今後の予定：福井昌平事務局長

パワーポイント資料を使い、これまでの小会の活動経過と来年度の事業計画案の提案を行った。
(別添資料参照)

■ワークショップ：

阿部代表と川嶋理事からのオリエンテーションを経て 6 つの分科会形式で実施

①ユネスコスクール（中西氏）

ユネスコスクールが今、日本各地で増えていることは歓迎すべきこと。ただし、ユネスコスクールは、手段であって目的ではない。ユネスコスクールをいかに ESD 普及の手段・触媒として活用していくかが重要。そのためには、地域の持続可能性を学ぶ場をユネスコスクールが提供していく必要がある。



但し、その場合の課題は3点ある。①学びの場をつくることのできる（学校関係者以外の「先生」役になれる）人材の確保、②現場の教員の理解、③地域と学校をつなぐコーディネーター役の必要性。この3つの課題をいかに解決しながらESDを円滑に推進するか、この点をモデル化し、ユネスコスクールに普及させていくことが、2014年に向けて必要なアクションであると思われる。



②開催都市プロジェクト（小川氏）

2014年の開催都市は、コップ10を反面教師としていくべきだろう。愛・地球博の成果継承として、万博開催都市の愛知県で行われたCOP10だが、実際には政府や専門家による本会議と地元をはじめ全国の市民、NPO、NGO等との連携がなされず、単なる場所貸しとなってしまった。本来開催地は重い責任を背負っており、施設貸しに終わってはならない。

国、企業、市民という3つのエンジンが参加することにより、新しい万博モデルが愛知県から始まったことを考えると、開催地が地域の多様な主体の参加と市民の創発性を促進させることは、開催の意義にとっても、その後の継続性にとっても重要なことだ。

そのために地元企業、労働者（連合）、市民など地域の多様な主体の参加と創発性が本会議とコーディネーションされなければならない。そのために、開催地としてESDを生活の身近なところから対話しあい（「ワールドカフェ」や文科省の「熟議」ような）、まず開催地がESDを身近なものとしていき、理解を深めること。これが多様な主体の参加を促す開催地の重要な役割であるはずだ。



③世界の祭典の全体構成（森氏）

ESDは、国際的に政府と政府が結びつくイベントが核だが、そこに何かを推進するチカラをもたらすには「市民参加」という横串を指すことが必要。その際に「市民参加」を促すモチベーション（強い動機）は何か？を考えていくと、おそらく市民が行う多くの活動は「地域固有」なもの、対象が限局された「ミクロ」なものとして「自分ゴト化」されているから強いモチベーションとなる特徴がある。しかし、それでは、なかなか外への広がり、普遍性を持ちにくい宿命を持っている。

だから、それぞれの市民の強いモチベーションが働くミクロの活動を取りまとめ、マクロ化するためプラットフォームをつくることで、運動全体の「自分ゴト化」することが大切となる。

その際のテーマは多岐にわたってかまわない。それこそ「子どものESD」などということでもいいし「医師のESD」とか「音楽家のESD」などということでもいい。あるいは日本発なのだから「和」をテーマとしていてもいいかもしれない。「和」と言えば、日本の人間国宝制度は海外で大変に評価が高い。知識・知恵の伝承の仕組みとしては確かにユニークなものだ。たとえば「人間

国宝大集合」などというのも一つの手かもしれない。

そういう小さな物語がたくさん集積され、「あなたがたのやっている活動は ESD なんですよ」という気づきのきっかけとなるようなテーマや、「参加したい」と思ってもらえる内容が展開されていくことが、祭典を構成すると思われる。そう考えると「世界の祭典」とはつまり人々が日常生活で強い意志で実践していることの集積なのだということ、その意味で「Life Expo」と言ってもいいのかもしれない。



一方、「自分たちの活動が ESD だからと言って、だからそれがどうした」という反応が当然だろう。その意味で、ESD 世界の祭典とは、祭典や活動の定義と一致する/しないを課題とするのではなく、単に観客としての参加することを超えて、「そこへ行って表現したい」「みんなに自分たちの活動を伝えたい」という参加へのモチベーションをインセンティブ（刺激）する内容を目指すべきではないだろうか？

それらが確保されることで、ネットなどバーチャルな世界で多くのことが体験可能な現代において、出向いてリアルな場に参加しようということになると思う。さらに、そこで多様な主体が交流することで新たな出会い・創造も生まれよう。

また、世界の祭典で訴求されるべき根本テーマである「ESD」を、もっと参加を促し、交流を誘発する言葉を開発する必要もあるかもしれない。「ESD とは “E=笑顔で、S=しゃべる、D=大事なこと”」などという言葉も、提案された。コンセプトualでもあり、面白いのではないか。こうした個々人の ESD の捉えかたを表現していくことは、世界の祭典への参加を開いていくかもしれない。

④サイバープロジェクト（吉澤氏）

現在インターネット上、またはデータベースには数多くの ESD に関する情報が蓄積されている。それらは一元化または共有される必要がある。

民間の取り組みや、話し合いの様子が分かりにくい公の会議を発信するツールとして、動画を通してユーザーと双方向にやり取りできるインターネット生中継（ユーストリームなど）やインターネット電話（スカイプなど）を積極的に利用すべきである。



またインターネットを介した情報発信のツールとしては、一般的にはブログやツイッターが挙げられるが、そこには同時に問題点も存在する。「ESD」という語のわかりにくさ、敷居の高さと翻訳についてである。

ツイッターのように少ない文字数や単語の羅列であれば、自動翻訳機にかけても大意は伝わる。ESD という語や取り組みを広め、親しみやすいものとしていくためにツイッターの利用は今後欠か

せないものとなるのではないか。

ESD という語を親しみやすいものとするために、インターネット上の簡易なコミュニケーションツールとして使われている「いいね！」ボタンのように「ESD だね！」ボタンを情報発信サイトに埋め込むという案も出された。ある程度の投票の蓄積があると自動的に（勝手）に「ここは ESD サイトです」と認定してしまおうというわけだ。今後の情報技術の進展に応じてこのような対応も可能になるのではないか。

環境省の+ESD プロジェクトに関しては、ウェブサイトを開設しても待っているだけでは裾野は広まっていらず、また「ESD」という語を知っている人しか登録しないので、登録インセンティブや「逆転の発想」によっていかに広く門戸を開いていくかについて今後大いに検討の余地がある。

⑤RCE 関連イベント（安田氏）

ESD の推進において国内で最も重要な主体の一つであり、その参加が必須と考えられる RCE（あるいは RCE を構成する各主体）に対して、その参加形態・内容を語らっていただくことで、「世界の祭典」の盛り上げを実現していくことを目的として当該セッションは設けられている。



第一回の事業化ワークショップにおいて、2014 年に RCE 世界会議を日本に招致するように働きかけていこう、という議論が行われた。それを受け、会議の内容や、その前提としてどのようなプロモーションが必要かについて話し合った。

まず、世界会議を開催するとして、第一に海外からの参加者との交流の機会を積極的に実現することが強調されると同時に、ESD の専門家を交えて、これまでの活動を分析・評価し、10 年間で何が変わったかという成果を公表する場とすることで意見が一致した。

さらに今回は、パンフレットにある「リレーイベント」を実際にどのように実施できるかを検討した。

そのなかで、総括会議と地域のイベントの関連づけの必要性が指摘された。COP10 ではパスを持っている人だけが入れる本会議に対して、市民はその周りでイベントをやっていた。その点でかい離があった。総括会議に来られない人も参加できる重層的なイベントである必要がある。どのようなイベントにするにせよ、市民参加型の地域どうしをつなげるかたちで実施したい（展示ブースやワークショップ、フィールド視察など）。例として、九州から仙台までの RCE をつなぐリレーマラソンのようなイベントをするのはどうか、という意見もでた。尚、パンフレットに記載されている時期や期間については（2014 年春～夏：一週間ごと）、再検討する必要がある。

※今回の事業化ワークショップの成果としては、これまで国内 REC のなかでも地球市民会議や「世界の祭典」に対する足並みやコミットメントの程度に温度差があったのが、今回の事業化ワークショップ（と翌日の国内 RCE 実務担当者会議）の話し合いを通して、RCE 間である程度の共通認識が芽生えたということが挙げられる。

また、国内 RCE 実務担当者会議のなかで、地球市民会議 2011 の分科会を「RCE の分科会」と RCE に限定するのではなく、ESD を地域で推進していくための地域ネットワークをどうつくっていくのかというテーマで、より多彩な地域の ESD 実践者を呼びこめれば、という意見も出ている。

⑥ESD×CSR（川嶋理事+香中氏）

企業が持つべき視点をまず話し合った。企業にとって ESD とは何か？まだほとんどと言っていいほど、企業内ではその理解は進んでいない。



日本で開催することの意義を CSR と絡めて発信するべきだ。SD（持続可能な開発）のための様々な「価値」は「日本の自然観」などの中にたくさん潜んでいるのだから。

同時に世界各国が参加する会議（祭典）であることも大きなポテンシャルとして意識したい。世界各国の「SDのためのEの工夫展」も考えられるだろう。

ひとつの目標として「経団連が2014年までにESDを企業のCSR活動の中にしっかりと位置付けること」などを提案しても良いだろう。

CSRの意義をさらに明確（クリア）にするために「CS[・]DR」（企業の持続可能な社会作りに向けた責任）と言い換えてはどうだろう。

また、一つのアイデアとして、2014年の祭典には企業は単体では参加できず、市民・NPO・自治体・教育機関などが複数のコラボレーション参加することを義務付けてはどうか。また、こうした形でのコラボレーション参加に向けた、様々な主体のカップリングの機会を2014年に向けて継続的に設けてはどうだろう。さらには2005年愛・地球博「地球市民村」での、日本のNGOと海外のNGOとの協働出展の例にもあるように、海外のESD主体と日本のESD主体とのコラボレーション出展の可能性もあるのではないだろうか。

さらに、2014年に向けてESD×CSRアワードを設けるとか、ESD企業連合のように企業が横串で連なることも重要だ。

■まとめ（中西氏）

「世界の祭典」とは、企業や学校がESDの触媒になるにはどうするか、ということ話し合い2014年にその成果を話し合うというイベントになる。

世界の祭典の原案は、政府が2012年に作ると思われるが、まずそこに何を反映させるべきかを一言ずつ。（そのための提言は2011年中に行われるべき。地球市民会議2011がそのための重要な機会になるべきだ。）



①CSR チーム 藤木氏

「企業」というくくりでは個々の話になってしまう。だからもう少し大きく、商工会議所や経団連に対して「地球市民会議」への参画を求めていく必要があるだろう。

②ユネスコスクールチーム 市川氏

ESD の推進には場の提供が必要だ。そして、ESD の場としてユネスコスクールが機能するためには、楽しくて参加することにメリットがあるということは重要。

③サイバープロジェクトチーム 吉澤氏

本会議とそのサイドイベントをつなぐ媒体としてサイバーが機能することができるのではないかと。コップ 10 では連携がうまくいかなかったが、外と内がうまく融合すればもっと有効なものとなったはずだ。

④開催都市チーム 古澤氏

本会議とのコーディネーションが開催都市の機能として最重要。多様なセクターが本会議に向けて双方向で話し合いができるように、2012 年段階でスケジュールや議題に関与できるようにするべき。

その前提として、地域がしっかりと語ることが重要。地域のお母さんが対話することも必要だ。「他人事だ」と思われてはうまくいかない。

⑤RCE チーム 三隅氏

より多くの市民を巻き込んで、日本らしい会議とするべきだ。英語ができなくても参加ができるチャンスだから、それを大きな目標にするべきだ。RCE は研究組織だけでなく、地域のリーダーシップをとっていくべきだ。RCE が「巻き込む主体」として機能するべき。

中西氏：「巻き込むこと」がキーワードとなることが分かった。それぞれの論点において「巻き込む仕組みの重要性」が語られたと考える。地球市民会議が「巻き込む場」として有効に機能するようにするべき。



福井事務局長：

コップ 10 などは総括会議とサイドイベントを通貫する軸が無いまま進んでしまった。世界の祭典はそうではなく、様々なイベントが相互に関連し影響しあう形で進むべきではないかと考える。

また、総括会議は政府が行うもの、一方「世界の祭典」は市民が推進するものということなのか、様々なイベントがバラバラと進んでそれを総括して「世界の祭典」とするのか。その点認識を共通させたい。

森氏：参加することが「世界の祭典」だという位置づけでどうか。

福井事務局長：相互作用があることは大事。政府やユネスコが会議をして宣言をして終わりということではないはずだ。

中西氏：「参加＝体験」ということを原案に反映させるにはどうあるべきか。

福井：地球市民会議に串が通るようにするべきだ。

小川氏：だが、計画レベルでそれを語ることはできるのだが、実施においてそれを維持することは難しい。ほとんど実現できないのが実情だ。実際に参加を担保することは非常に大変だ。そのためのスキームをしっかりと設計しないとイケない。

佐野氏（ESD-J）：いろいろなステークホルダーがフラットに参加することは重要だ。だが、単に予算を措置して形をつくることができても、そこに魂を入れるためにはどうするか。大きなビジョンを共有できないと主体的でかつ参加する喜びは持つことができない。関係性づくりができれば世界の祭典が終わってもそれは維持できる。原案の中に「関係性づくり」「フラットで自由に言い合える関係性づくり」ということが語られないとイケない。政府は別格ということではなく1ステークホルダーとして参加するべきだ。

中西氏：関係性づくりの担保を地球市民会議で語らうことが必要だ。2014年は公式の総括会議にとどまらず、市民が広く参加できる事業でありそれらを包含して「世界の祭典」とする。

だがそれを担保するためには、それぞれのステークホルダーがそれぞれの立場で参加を担保するための語らいの場を設けていくことが必要だ。

原案には「関係性づくり」ということを主体に各ステークで語らっていただいた結果を反映させることになるということだろう。

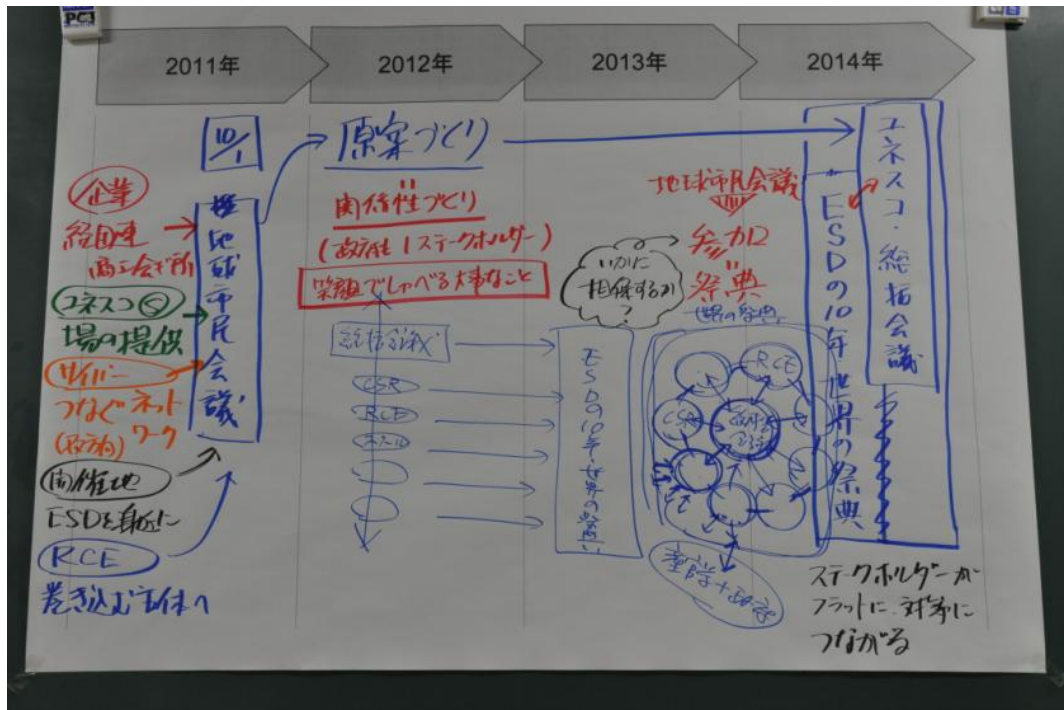
福井事務局長：今日の成果はパンフレットの改訂版に反映させるようにする。

伊藤氏（RCE 兵庫・神戸）

世界に目を向ければ日本が必ずしも世界でトップを走っているわけではない。「地球市民会議」ということだが、皮肉な言い方をすれば「自分は地球市民だ」と思っている人の集まりに過ぎない可能性もある。日本の作った枠組みの中で世界の人をお客さんと呼んで終わり、ということではなく、世界の事例を発表する機会を設けるべきではないか。RCEもICTを駆使したプラットフォームをつくっているのだから、実際に参加は難しくても様々な事例を紹介できるのではないかと思う。

福井事務局長：地球市民会議ではアジアの先進事例を中心に紹介している。

3か年は民間主導でやってきているのだが、2012年以降もネットワークを広げる必要はある。そのためにも政府がどのように引き取るか、民間としてどのように進められるのか、ご指摘の点を踏まえて設計する必要がある。



阿部代表：世界の事例を見ているが、確かに先進的な事例が多い。そのネットワークを駆使していくことは重要だ。とはいえ、日本を見ると、様々なステークが ESD を進めていこうとしている国はほかにはなかなかない。特に企業の ESD は事例がまだ少ないので、企業の取り組みを促すことは必要だし、かつ企業の ESD については日本が進んでいると考えている。

■おわりにあたって：川嶋理事

ワークショップの参加についてはハードルは高くはしていない。だが、参加していただいた以上は積極的にかかわっていただければと考えている。

以上